五条坂に残る粟田口の登り窯―安田家と京都陶磁器合資会社

立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員　前﨑信也

１．はじめに：五条坂コミュニティと登り窯

近世・近代の京都の陶磁器業を考える上において、登り窯のはたした役割は重要である。これは陶磁器を焼いて製品にするという、窯の生来の機能だけのことを言っているのではない。登り窯は分業によって成り立っていた京焼コミュニティのハブであり、事業主・陶芸家・職人・問屋、そして彼らの家族の生活の糧を生み出す場であった。

五条坂地域の登り窯の多くは寄り合い窯（共同窯）だった。個人で窯を所有しない陶家が陶磁器を焼成するには、共同窯の中に高さ約 180cm、幅約 35cm、奥行約 50cm の「一立」と呼ばれるスペースを必要なだけ借りる。[8] 窯を焚く前には、その窯を使う窯業者・陶芸家が製品・作品を持ち寄り窯に詰めていく。それが終わると、窯焚き専門の職人が集団でやって来る。焼くという行為を担当する窯焚き職人だけではなく、松割木を割る専門の職人や、窯を焚く時に出る廃棄物を集めるだけの職人も一緒についてくる。燃料の松割木の準備がおわれば、窯焚き開始である。窯焚き職人は窯焚きで最も重要な最初の数室の窯焚きを行うだけで、それが終わると残りは窯の所有者の仕事である。窯焚きが終わると、製品を窯につめた全員で窯から作品を出す。そうして、うまく焼けた製品は市場に出荷されるのである。五条坂で生み出された、全ての製品・作品は登り窯を通り世に出て行く。陶業に関わる多くの人が登り窯は、五条坂の陶磁器産業のハブという役割を果たしていた。[9]

五条坂の窯業コミュニティの中心にあった登り窯に存続の危機が訪れたのは昭和 46 年（1971）のことである。京都府公害防止条例の施行により京都市内の登り窯に排出規制が課された。昭和 48 年（1973）、京都陶磁器協同組合が排煙・防音工事を施した共同窯を一旦は復活させたが、昭和 55 年（1980）にこの共同窯が火元とされる火事がおこる。それは地域住民からの廃止を求める運動の契機となり、昭和 57 年春に登り窯利用の中断が決定された。[10] 以来、一度も火を入れられていない登り窯は「無用の長物」どころか、使い道のないやっかいな「産業廃棄物」となり、ひとつまたひとつと取り壊されていった。五条坂では陶磁器の焼成には使えなくなった登り窯の代わりとして、小規模のガス窯や電気窯が開発され、またたく間に普及した。生産者は自分の工房で製品を焼けるようになったが、それは登り窯を中心として形成されていた複雑な分業体制の終息を意味し、地域コミュニティのつながりの希薄化を促したといわれている。[11]

２．五条坂に現存する登り窯

戦後の時点で 16、17 基あったとされる登り窯で、現在まで当時の形を留めているのは元藤平窯、

8 森野彰人編『新天地を求めた京焼　清水焼団地五十年の歩み』（清水焼団地協同組合、2011）p. 6

9 同 p. 6-7

10 林かおり「五条坂にみる京焼の現在―美しき手仕事と私たちの生活―」立命館大学ＣＯＥアート・エンタテインメント創成研究編『京焼と登り窯―伝統工芸を支えてきたもの―』（立命館大学ＣＯＥアート・エンタテインメント創成研究、2006、pp. 218-227）p. 219

11 詳しくは本報告書の清水愛子「京焼の近代化における登り窯の役割について」に述べられている。

浅見五郎助窯（祥瑞窯）、河井寛次郎窯（鐘溪窯）、小川文斎窯（文斎窯）、井野祝峰窯（祝峰窯・一部のみ現存）の５基。この他に、登り窯が取り除かれ、跡地のみ残る入江道仙窯跡、煙突のみ残る三浦竹泉窯がある。[12]

現存する５基の登り窯のうち、浅見五郎助家の祥瑞窯、及び小川文斎家の文斎窯は、大正期から現在まで所有者に変更はない。残りの３窯については所有者が以下のように変わってきた。

元藤平窯：明治 42 年・京都陶磁器合資会社→昭和 18 年・藤平窯業有限会社→藤平陶芸有限会社→京都市

河井窯：　江戸後期・清水六兵衛家→大正９年・河井寛次郎家（鐘溪窯）[13]

祝峰窯：　江戸後期・清水七兵衛家→明治 15 年・山村長山家→山本龍山家→明治 40 年頃・清風與平家[14]→戦後・井野祝峰家（祝峰窯）

本報告書が研究対象とする元藤平窯を含めた現存する５つの登り窯を検討する上で鍵となる資料がある。京都市立陶磁器試験場附属伝習所（以下、伝習所）に大正５年から８年まで在籍し、授業や伝習所での日常について詳細な記録を残した松林靄之助（1894-1932）の記録がそれである。[15] 松林は宇治の朝日焼十二世松林斎（1865-1932）の四男として生まれ、伝習所では陶画科で１年間、特別科で２年間を過ごした。伝習所の特別科では、最新知識を持った窯業技術者の要請を目的として窯業全般の専門的知識が教えられたが、松林がそこで受けた授業に登り窯に関する講義があった。講師は後に初代の重要無形文化財保持者（民藝陶器）に認定される濱田庄司（1894-1978）である。濱田は大正４年（1915）に東京高等工業学校の窯業科（現：東京工業大学無機材料工学科）を卒業後、先輩だった河井寛次郎（1890-1966）を慕い、河井が勤務していた京都市立陶磁器試験場に就職をした。試験場の技師は伝習所で学生に対する講義も担当していたのである。

濱田の講義内容を書きとめた松林のノート「濱田先生登り窯講義」（全 14 頁）が松林家に現存している。松林が特別科に在籍したのは大正６年から８年（1917～1919）であるので、講義はこの期間に行われたものである。[16] 授業内容は窯の分類から始まり、各地の窯の種類の解説があり、最後に「京窯」として京焼の登り窯の説明がされている。そこには京窯について以下のように解説されている。

１．　京都の他に、信楽焼、萬古焼、常滑焼でも同様の構造の窯が使用される。
２．　横狭間である。
３．　第１室で最も良い製品（磁器）が焼ける。
４．　焼成室内の場所によって焼き上がりに差があり、端が悪く、端から数えて３、４立目が良い製品の焼ける場所である。
５．　焼成室の大きさはほぼ同じ。構造は以下の３種類に区別できる。
　（ア）　全ての室が同じ幅

---

12 木立雅朗「旧・道仙化学製陶所窯跡の発掘調査」立命館大学ＣＯＥアート・エンタテインメント創成研究編『京焼と登り窯―伝統工芸を支えてきたもの―』（立命館大学ＣＯＥアート・エンタテインメント創成研究、2006）pp. 180-188

13 毎日新聞社編『生命の歓喜 生誕 120 年　河井寛次郎展』毎日新聞社、2010 年、p. 167

14 真清水蔵六『古今京窯泥中閑話』永澤金港堂、1935 年、p. 63

15 前崎信也『大正時代の工芸教育―京都市立陶磁器試験場附属伝習所の記録』宮帯出版社、2014 年

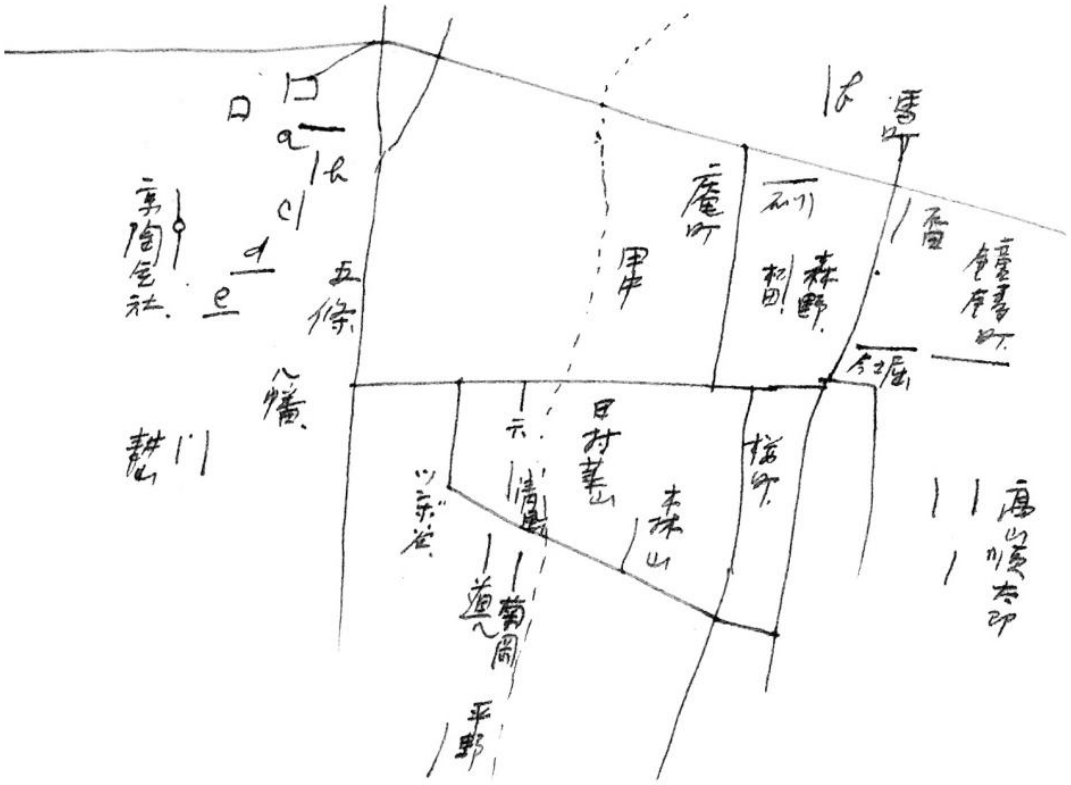
16 「濱田先生登り窯講義」は前崎前掲書 p. 3-24　に全文が掲載。

（イ）　徐々に幅が大きくなる窯

（ウ）　一端幅が広くなったあと狭くなる窯

６．　第１室か第２室を地面の高さとし、胴木間は地面より掘り下げてあるものが多い。

上記の解説の次に、五条坂の手書きの地図が描かれており、当時五条坂にあった登り窯の位置と向きが線で示されている。その中に、先述した現存する登り窯５基を全て確認することができる。



（a. 丸山窯、b. 文斎窯、c. 竹泉窯、d. 浅見窯、e. 入江窯、f. 河原窯）

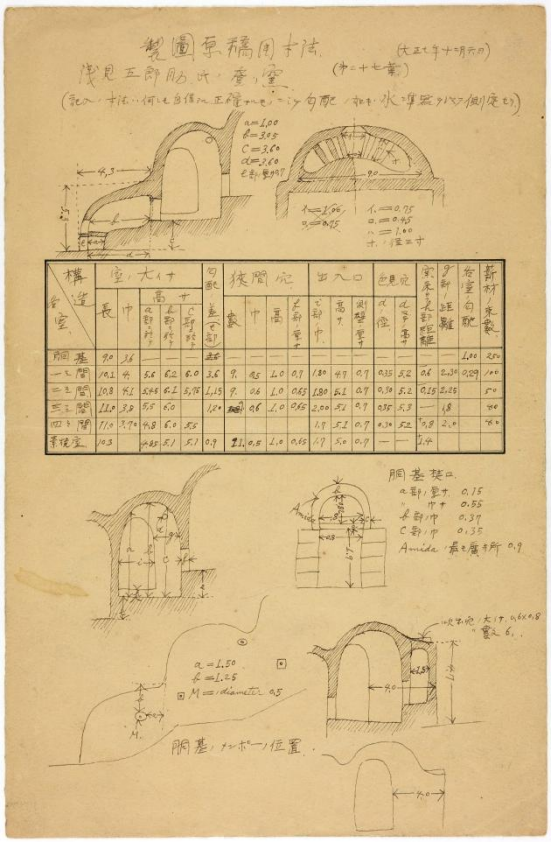
藤平窯の前身である京都陶磁器合資会社は、地図の左上に「京陶会社」とあり、２つの登り窯がつながっている様子が見てとれる。ノートの最後には五条坂と粟田口の登り窯９基を実測した詳細な寸法の表が掲載されており、文斎窯、及び現在は失われてしまった京都陶磁器合資会社の西の窯が含まれている。[17]

松林靄之助関連資料中の五条坂の登り窯に関する資料はもう１件ある。「製図原稿用寸法」と題された資料がそれで、浅見五郎助窯（祥瑞窯）と、祝峰窯（当時は清風與平の窯）の大正７年（1918）の実測図が図入りで記録されている。つまり、現在まで五条坂に残る５基の登り窯の内、３基については大正前期の詳細な実測値が残っているのである。

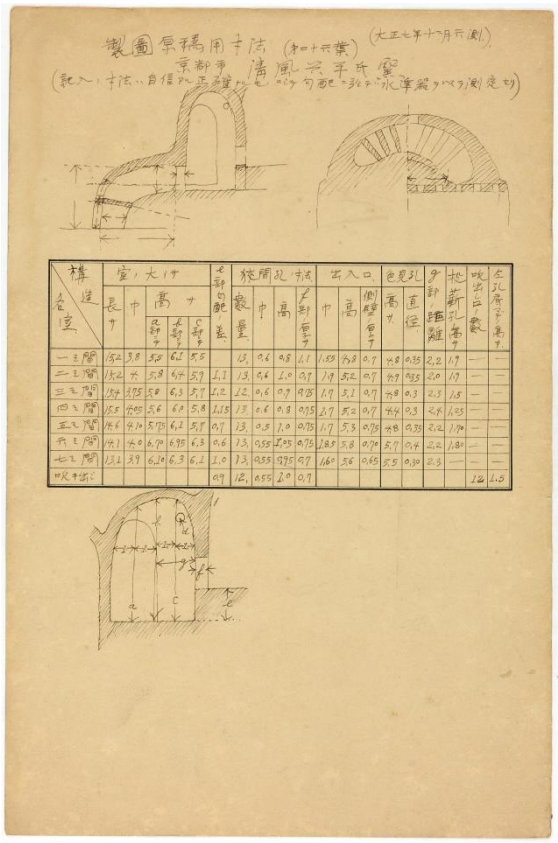
３．登り窯の構造

ここからは、元藤平窯と、現存する４基の登り窯の構造の比較をもとに、元藤平窯の特長を明らかにしたい。対象とする復元図・実測図は一島政勝氏が作成したものであり、本報告書の資料中に掲載されている。元藤平窯（東の窯）については過去に測量したデータ及び「濱田先生登り窯講義」

[17] 窯の実測値が掲載されているのは以下。小川文斎窯、木村越山窯、井上柏山窯、丸山窯、清水六兵衛窯、福田窯、京都陶磁器合資会社西の窯、東錦光山窯、安田傳七窯。前崎前掲書、pp. 17～23



浅見五郎助窯の寸法



清風與平窯（現：祝峰窯）寸法

掲載の元藤平窯（西の窯）のデータを合わせて２窯が向かい合って存在していた様子を復元した。浅見窯、文斎窯、祝峰窯の復元図については、松林の実測データを元に作成した。浅見窯については平成 21 年（2009）の実測図もあるので併記した。河井窯については、過去の記録が存在しないため、2014 年 10 月～11 月にかけて測量したデータを用いた実測図のみである。

ここで前提として注意していただきたい点がある。現況で大正期の復元図と現況の実測図があるのは浅見窯のみであるが、大正期と現在の浅見窯の構造を比べてみると相当な改変を認めることができる。現在の浅見窯の焼成室は大正期の窯より１室多い。焼成室の幅は、大正期の窯は徐々に大きくなり最後の素焼室だけ幅・奥行が狭くなっている。他方、現在の焼成室は第１室から５室までが同じ幅で、最後の室のみ幅と奥行きが狭まっている。

元藤平窯（東の窯）も同様に以前は一旦幅が広がったあと狭くなるという構造の窯だったことが、現存する過去の窯の礎石からわかっている。しかし、現在は浅見窯と同様に同じ幅の室が続き、最後に狭くなるという構造をしている。

河井寛次郎記念館学芸員の鷺珠江氏によると、河井窯にも過去に変更が加えられたようだ。大正９年に河井寛次郎が取得した当時の窯は、現在よりも幅が広く、前にもう１室あり全部で９室だったという。地面を掘り下げたところに焼成室と第１室があったが、湿気が多く焼成に不具合が生じた。そこで、昭和 38～39 年頃に、幅を狭くし、胴木間を埋めて第１室を胴木間に造りかえたというのである。

祝峰窯も同様に昭和 46 年（1971）の大気汚染防止法の直前に建て直されており、現存する窯は一度も火を入れられることはなかった。焼き締まっていないため水をかければ崩れることから、後方の室はこわされ、耐火煉瓦は他の窯のために再利用された。現在は胴木間と前から３室のみ現存

している。

窯は数十年という単位で建て直されるものである（建て直すことを「つき直す」という）。大正期から戦後の登り窯使用の禁止までに、一度は窯の立て直しに伴って時代の要請に応じた構造の改変が行われたのであろう。生産に見合ったサイズへの変更や、構造に関する不具合の修正などがそれである。

先述した「濱田先生登り窯講義」には京窯の構造として、「５．焼成室の大きさはほぼ同じであるが、全ての室が同じ幅、徐々に幅が大きくなる窯、一端幅が大きくなったあと小さくなる窯の３種類がある」とあった。河井窯は窯構造の改変前も現在も焼成室の幅は同じ、浅見窯、元藤平窯（西の窯）の幅は徐々に大きくなる構造（どちらの窯も最後の室だけは少し小さい）、文斎窯と祝峰窯は第４室が最も幅が広く、第５室以降は徐々に狭くなっていく構造となっている。つまり、濱田庄司の講義で挙げられている京都の登り窯の３種類の構造を全て確認することができる。

しかし、近年実測した元藤平窯（東の窯）と浅見窯の２窯のように、同じ幅の焼成室が続き最後の数室の幅が狭くなる構造は、濱田の授業では挙げられていない。このことから、大正７年以降に、３種類あった五条坂の登り窯の構造の統一化が進んだ可能性を考えることができる。今後、文斎窯、祝峰窯の測量を計画しているため、この点については指摘するのみに留めておく。

復元図（大正期）と実測図（現状）の違いを踏まえた上で、復元図を中心にその差を検討してみよう。浅見窯の焼成室は５室、文斎窯は６室、祝峰窯は７室、河井窯（実測図のみ）は８室、元藤平西の窯が８室、同東の窯（実測図のみ）が９室である。室数の差によって窯の全長が異なっている。元藤平窯の登り窯は東か西の１基だけでも焼成室の室数や、焼成室の容積も五条坂の他の登り窯より大きなものであったことは既に指摘されている。[18] 更に比較的規模の大きな窯が１基ではなく２基、山なりに向かい合う形で座していたことが、元藤平窯の特異性を象徴していると言える。つまりその規模の大きさという点において、元藤平窯は五条坂で運営されていた登り窯の中でも特殊な部類に入るものであった。この特殊性を生んだ要因のひとつに、元藤平窯が五条坂にありながら、粟田口の陶磁器業者に建造されたという背景がある。

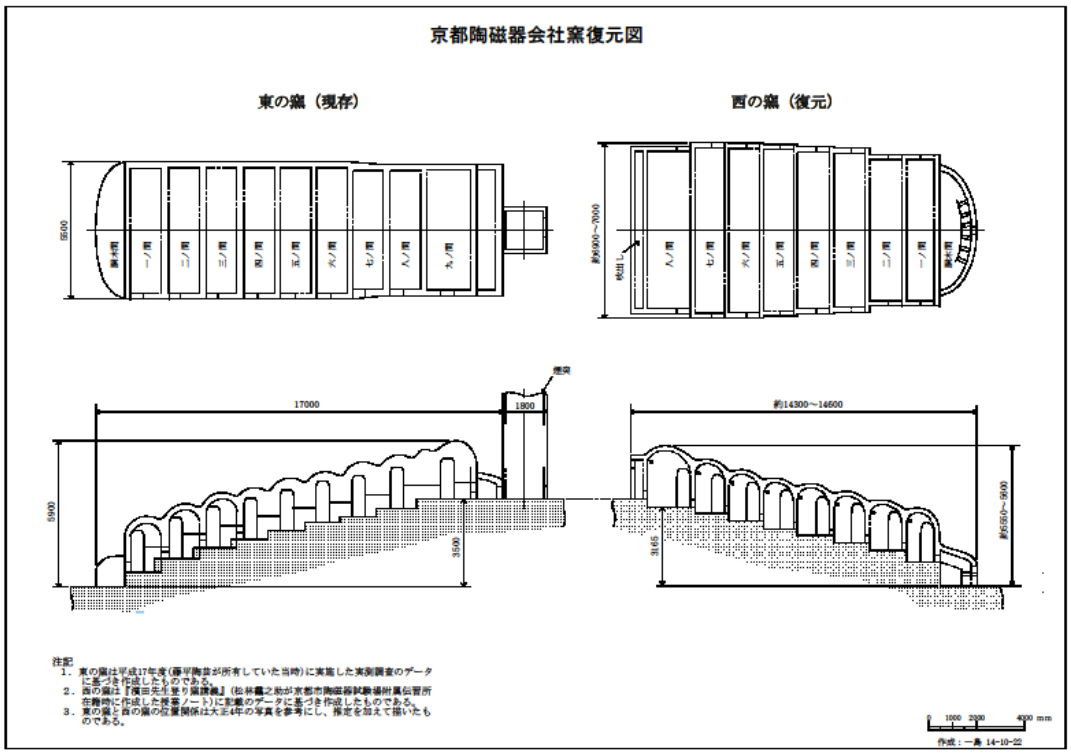
４．安田家と京都陶磁器合資会社

現在京都市が所有する元藤平窯は、当初は京都陶磁器合資会社の窯として二代安田喜三郎（?～1915）と十五代安田源七（?～1932）に建造された。[19] 明治 36 年(1903)に京都商業会議所が外務省通商局へ報告した資料には、同社が京都の貿易会社 21 社のうちの１社に数えられており、会社の概要が記載されている。

商社又ハ商店号：	京都陶磁器合資会社
重要ナル取扱商品：	粟田焼陶器並ニ磁器
本店所在地：	白川橋三条下ル
内外支店又ハ代理店所在地：	神戸三ノ宮一丁目
外国ニ於ケル貿易取引先：	米国オハイオ州、桑港、紐育、ボストン[20]

[18] 同、pp. 154-159
[19] 本報告書の中ノ堂一信「五条坂の登り窯の変遷と元藤平陶芸所有の登り窯に関する文献紹介」を参照。
[20] 京都貿易協会編『明治以降京都貿易史』（京都貿易協会、1963）pp. 187-188

復元図：元藤平窯（東西の窯）

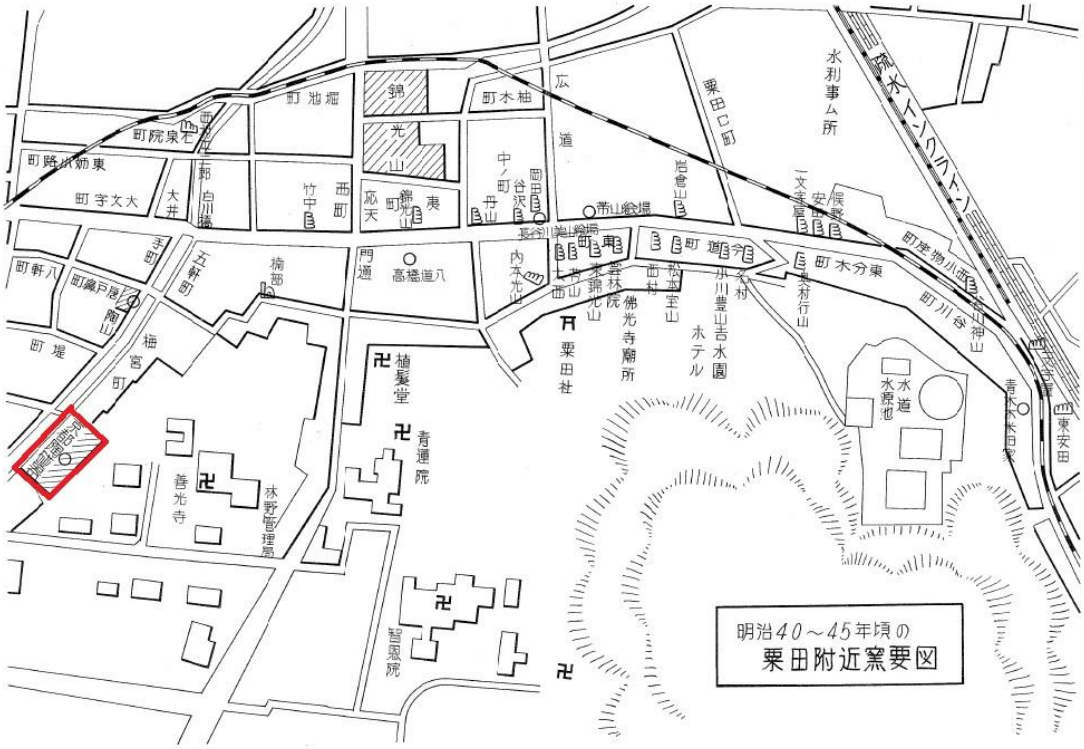


これによると、京都陶磁器合資会社は粟田焼と磁器を扱い、神戸に支店を構えていた。製品の輸出先はアメリカのオハイオ州（主要都市はコロンバス、クリーブランド、シンシナティ）、サンフランシスコ、ニューヨーク、ボストンであったという。同社は明治から昭和初期にかけて国外で開催された博覧会に製品を出品。明治 37 年（1904）のセントルイス万博[21]、明治 40 年（1907）の韓国京城博覧会[22]、大正４年（1916）にサンフランシスコで開催されたパナマ太平洋万国博覧会[23]、大正 14 年（1925）のパリ万国装飾博覧会[24]、昭和２年（1927）のウィーン国際見本市に参加したという記録が残っている。[25] 粟田口の当業者は明治前期に外国貿易に着手し欧米で好評を博したが、中でも安田家は、錦光山家や帯山與兵衛、丹山青海らと共に、当時の粟田口を代表する窯業家だった。

安田家が経営する京都陶磁器合資会社が五条坂に窯を建造したのは、藤平文書の記述によると明治 42 年６月である。[26] その３年後の大正元年（1912）、稲津近太郎によって編纂された『京都市及接続町村地籍図 第二篇 下京之部』（京都地籍図編纂所発行、京都府立総合資料館蔵、以下『地籍図』）がある。元藤平窯の所在地は当時の住所で六波羅裏門通二丁目竹村町 150、151 番地（現：東山区竹村町 150、151）であるが、この土地の地主氏名が「日本陶磁器合資会社」となっている。[27] 「日本」は「京都」の誤記であると考えるべきであろう。さもなければ、大正元年頃に京都陶磁器合資会社が日本陶磁器合資会社という社名を使っていたのかもしれない。『地籍図』の同項目に

[21] 同、pp. 180-183
[22] 同、pp. 248-250
[23] 同、pp. 351-352
[24] 同、pp.353-354
[25] 同、p.356
[26] 本報告書の木立雅朗「元藤平陶芸登り窯について―遺構と記録―」を参照
[27] 稲津近太郎編『京都市及接続町村地籍図附録 第二編 下京之部』（京都地籍図編纂所、1912 年）p.283

は地主の住所が記載されており「梅宮町」とある。同資料で梅宮町（白川筋東川端三条南入）の地主を見てみると、安田喜三郎の名を認めることができる。[28]そしてこの梅宮町の安田の住所（482、483 番地）は、藤岡幸二編『京焼百年の歩み』（京都陶磁器協会、1962 年）に掲載されている「明治 40～45 年頃の粟田附近窯要図」に「京都陶磁器」と記されている京都陶磁器合資会社の所在地と一致する。

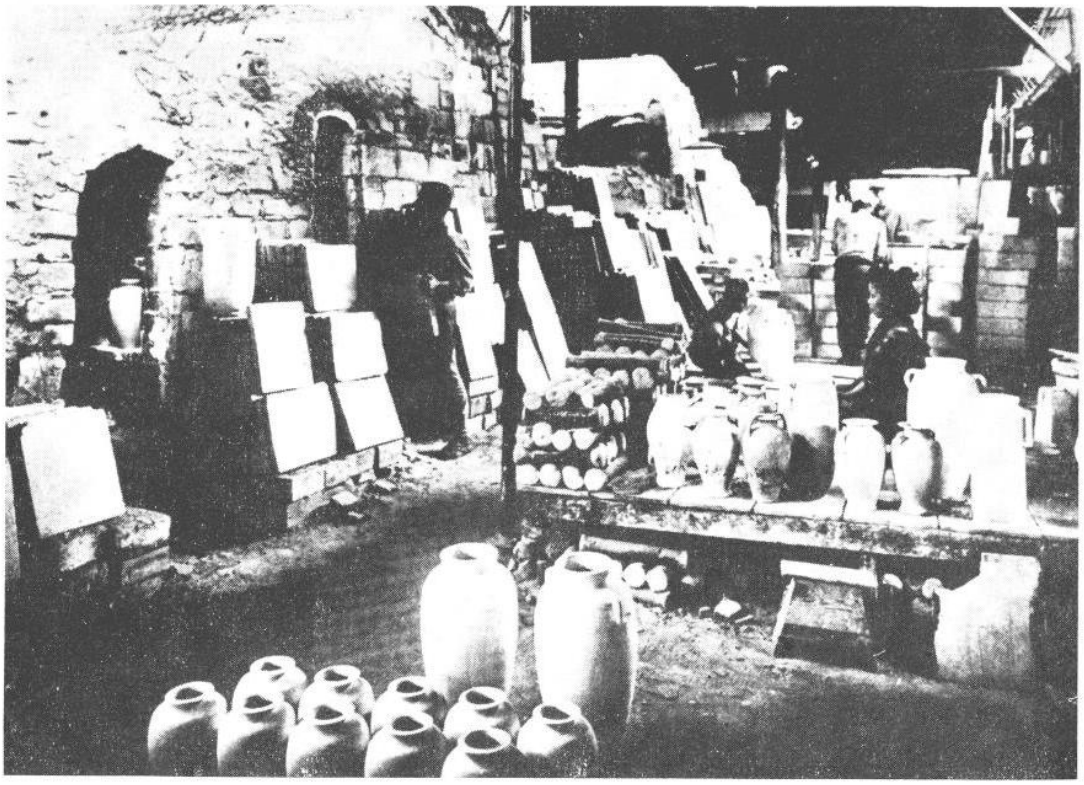


『京焼百年の歩み』には、「大正４年京都粟田焼工場の一部（京都陶磁器合資会社工場）」とキャプションのついた登り窯の写真が掲載されている。[29] ２基の登り窯が山なりに向かい合っていることが確認できる。写り込んでいる作品は、その形と大きさから典型的な輸出向けの粟田焼の花瓶である。

大正４年（1915）には京都陶磁器合資会社が現在の元藤平窯の場所に既に工場を構えていた。二つの登り窯が向かい合う窯が粟田口の工場にも存在した可能性は否定できないが、この写真が元藤平窯において二つの窯が存在していた時代を示す写真である可能性は高いだろう。[30]

京都陶磁器合資会社に変化の波が訪れたのは戦時中のことである。昭和 12 年（1937）の支那事変以後に京都では陶磁器生産の統制が開始され、昭和 16 年（1941）の太平洋戦争開戦により、翌 17 年の 1 月にはついに資材需給の調整を理由に減産をよぎなくされた。商工省の通達をうけて結成された京都府陶磁器工業整備委員会では、府下の企業体を整理統合する方針を打ち出す。結果として市内の陶磁器事業者は 63 の企業に整理統合されることとなった。[31] この時に結成した 40 の有限会社のひとつが藤平窯業有限会社である。同会社は現在の京都市立開睛小中学校の東側、京都

[28] 稲津前掲書、p.105
[29] 藤岡幸二『京焼百年の歩み』（京都陶磁器協会、1962）p.109
[30] 2009 年 9 月の木立雅朗教授による藤平陶芸の末広氏への聞き取り調査では、この写真が元藤平窯であると断定することのできる情報を得ることはできなかった。木立教授の見解では、現在の登り窯と写真の登り窯を比較すると、写真でゴウ置き場になっている部分を平場にし、窯後半部の盛り土をなくせば、写真と似た情景になるという。これが元藤平窯であったとすると、大正時代から現在に至るまでの改変の大きさを表す重要な証拠になるという。
[31] 藤岡前掲書、p.127-130



大正４年　京都粟田焼工場の一部　（京都陶磁器合資会社工場）

市東山区六波羅竹村町 151 番地に昭和 18 年（1943）に設立され、京都陶磁器合資会社はその歴史を閉じることとなった。[32]

元藤平窯の前身である京都陶磁器合資会社は、粟田口を代表する陶磁器業者の安田家（十五代安田源七・二代安田喜三郎）によって主に米国向けの粟田焼の工場として創設された。大工場を設置して欧米向けの大量生産を行い明治期に成功を納めた粟田口の経営方法。その大型の窯を五条坂に２基建造し、五条坂にありながら粟田焼の素地の大量生産を行ったのが京都陶磁器合資会社であった。だからこそ、現存する五条坂の登り窯とは規模も性格も異なる窯となったということができるのである。

おわりに：粟田口の遺産

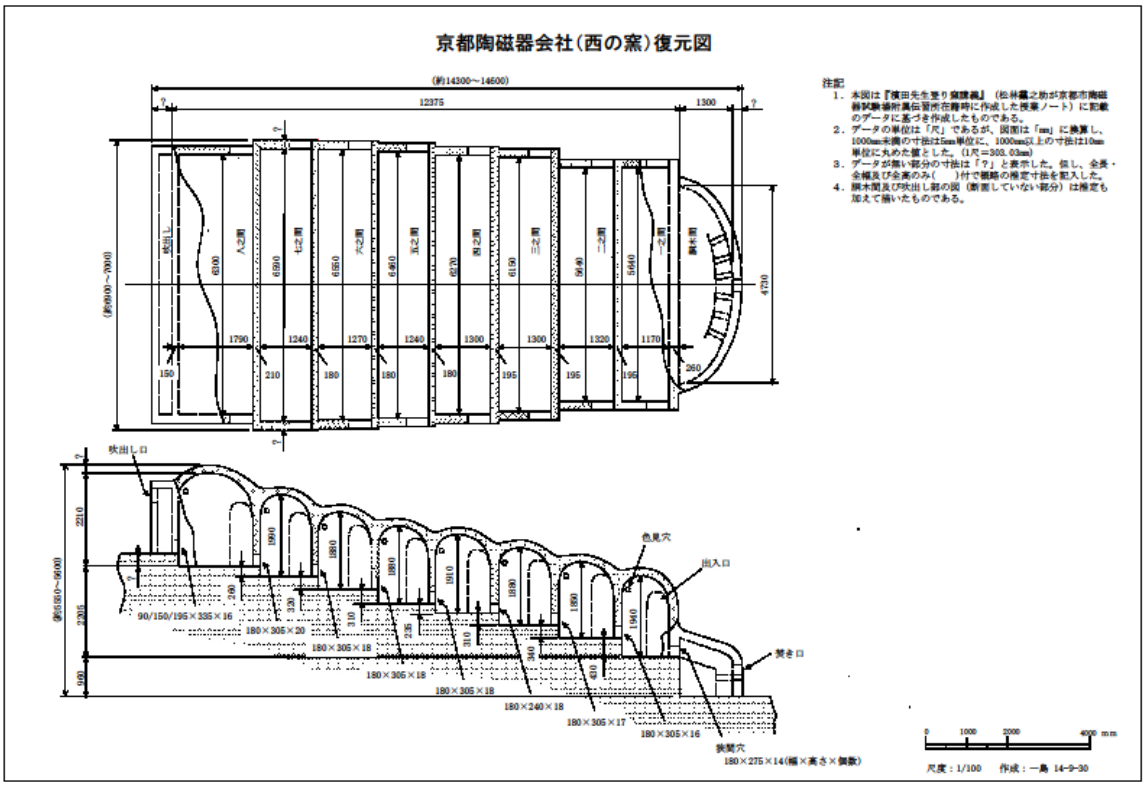
本論の前半では五条坂の登り窯がいかに地域窯業者のハブとしての役割を果たしたかを述べた。しかしながら、五条坂における登り窯建造当時の元藤平窯（京都陶磁器合資会社の登り窯）の役割は、地域の他の登り窯とは異なるものであった。その理由は、五条坂では異例の粟田口の窯業家が建造した規模の大きな工場であったこと。そして、五条坂の主要製品である磁器ではなく大量生産の粟田焼の陶器を生産していたことから生じている。

近代において、地域では異質な登り窯であったという元藤平窯の特長を知ると、他に現存する 4 基の窯よりも「五条坂の登り窯」としての歴史的な価値が小さいように感じる。確かに、「元藤平窯が五条坂の歴史を象徴するか否か」ということを述べれば、その通りであるかもしれない。しかし、この窯は粟田口を代表する安田家が築いた窯である。明治初頭から海外向けの輸出品を大量生

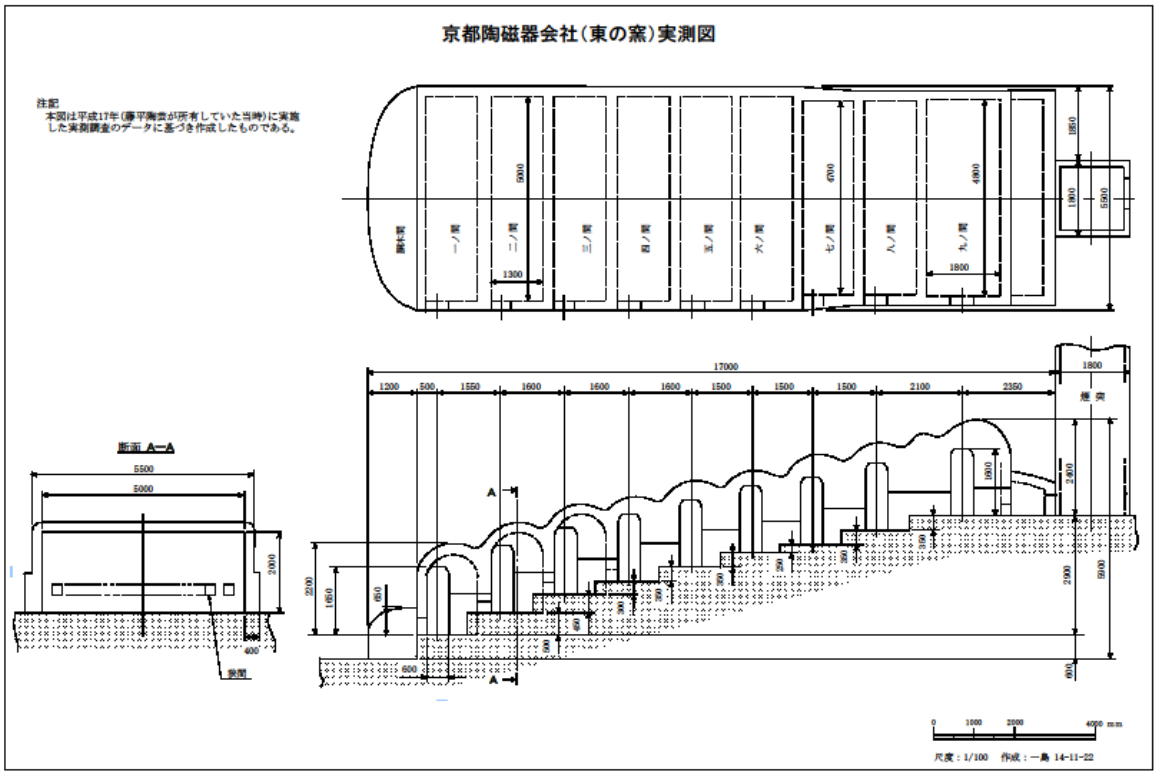
[32] 詳細については本報告書の中ノ堂前掲論文、木立前掲論文を参照

産して大成功を納めた粟田口。残念なことに、三条の粟田口界隈にあった登り窯はすべて取り壊されて１基も残ってはいない。その名残を残すのは今や元藤平窯だけなのである。つまり、元藤平窯が五条坂に残ったことによって、粟田口と五条坂という江戸後期以降の京焼を支えた二つの地域の異なる性格をもった登り窯を、我々はすぐ近くで見ることができる。元藤平窯という粟田口の登り窯と、４基の五条坂の登り窯。５基すべてが、近世から近代にかけて、日本だけに留まらず、世界の陶磁器業界に知られた京焼の歴史を、現代の我々に教えてくれる貴重な文化遺産であることに他ならないのである。

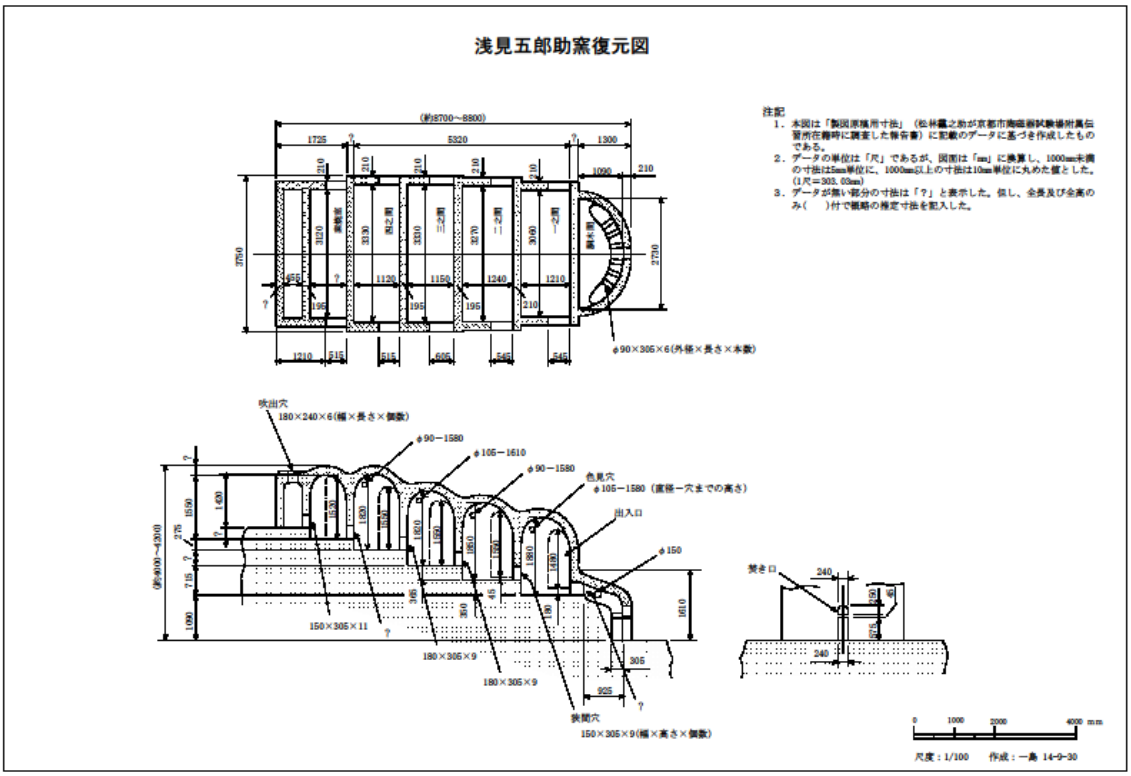
復元図１：元藤平窯（西の窯）



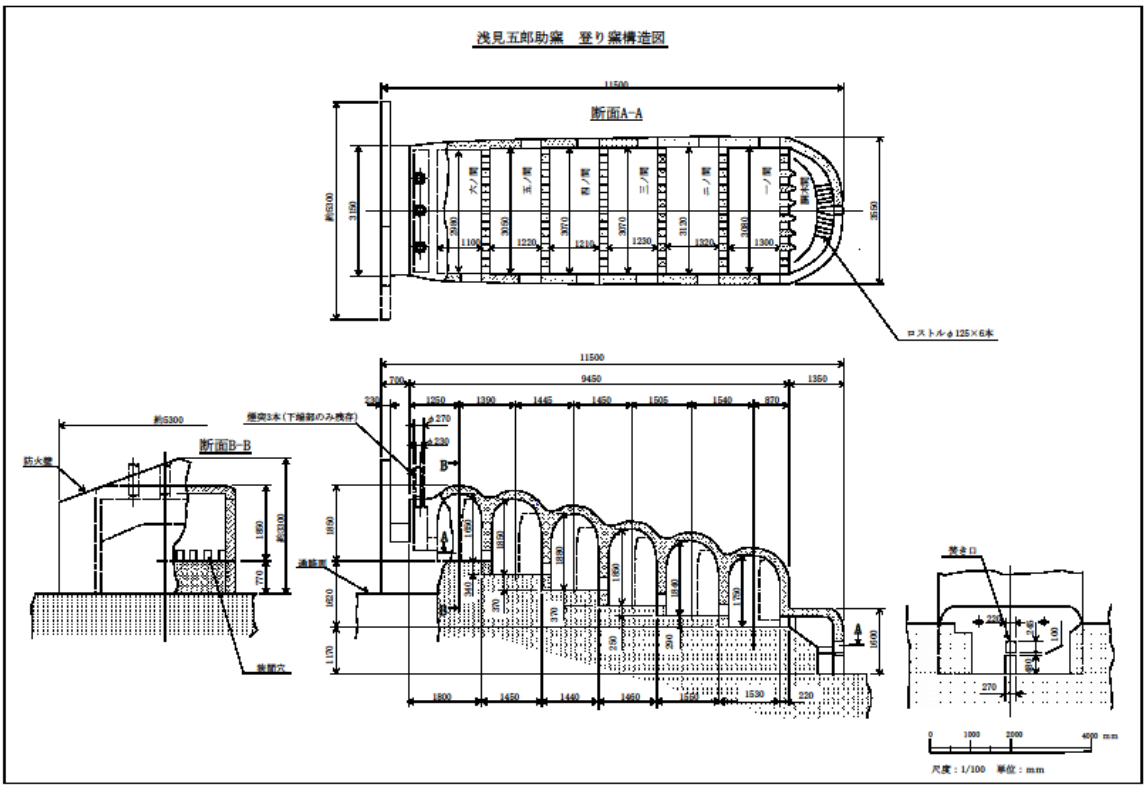
実測図１：元藤平窯（東の窯）



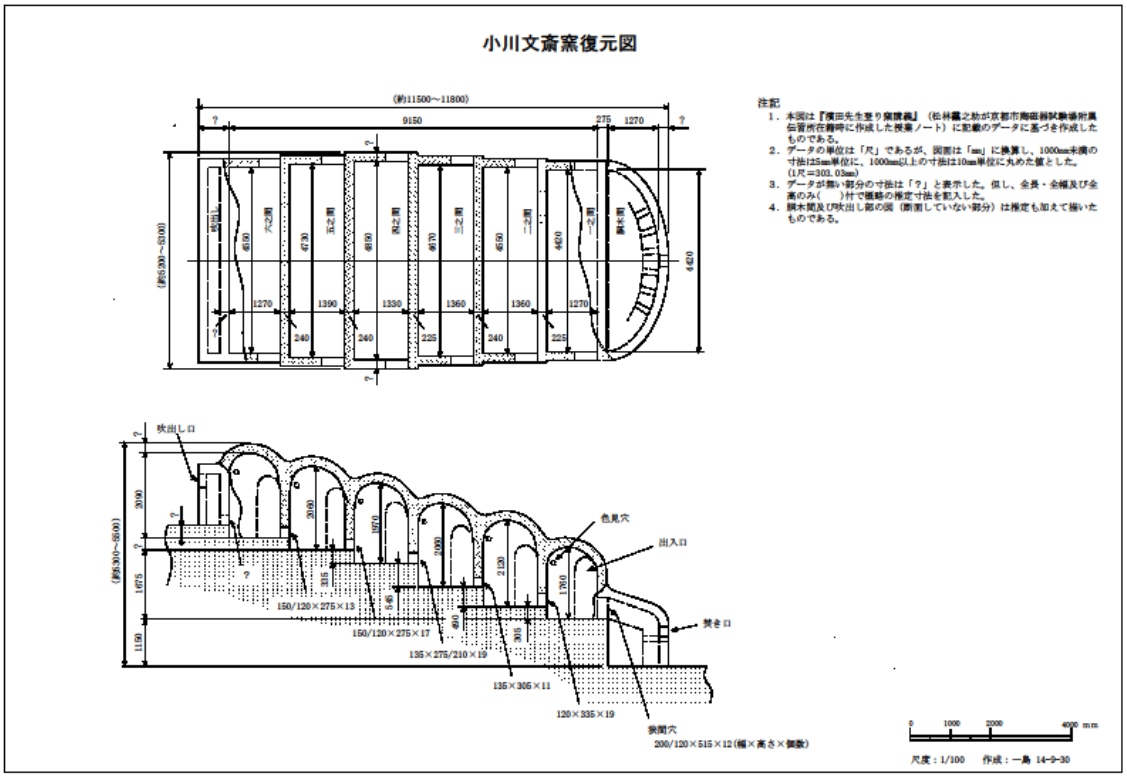
復元図２：浅見五郎助窯（大正 7 年 12 月採寸）



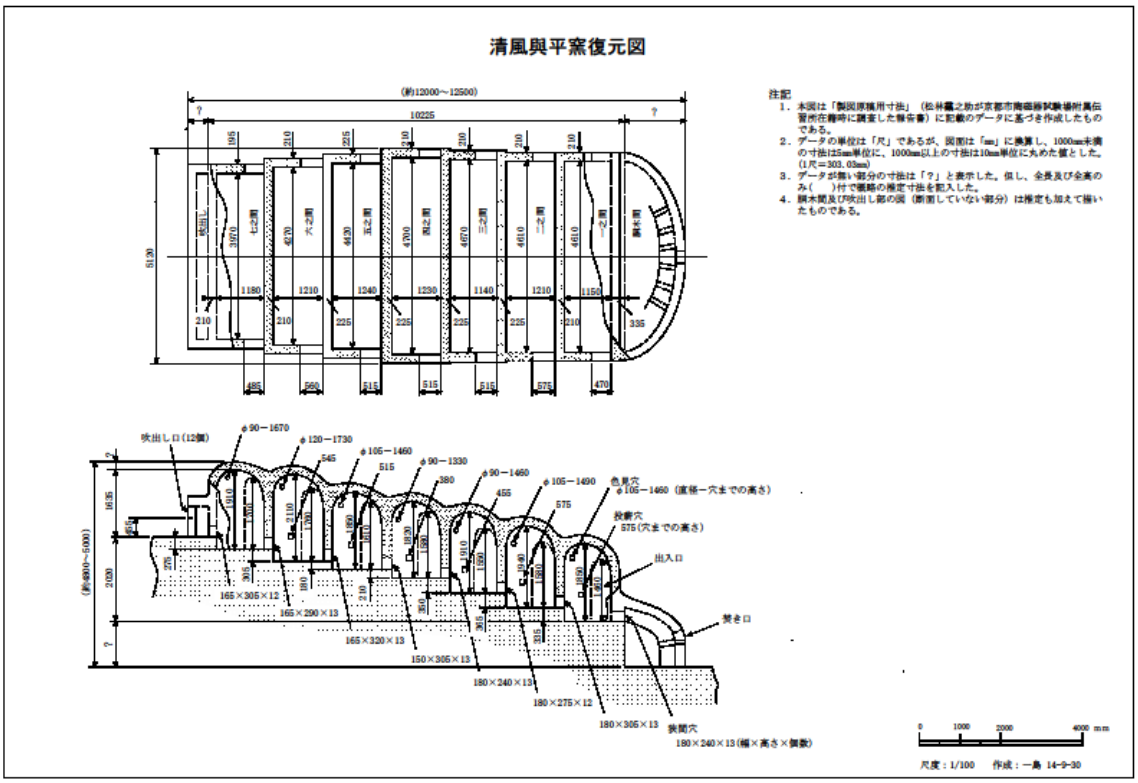
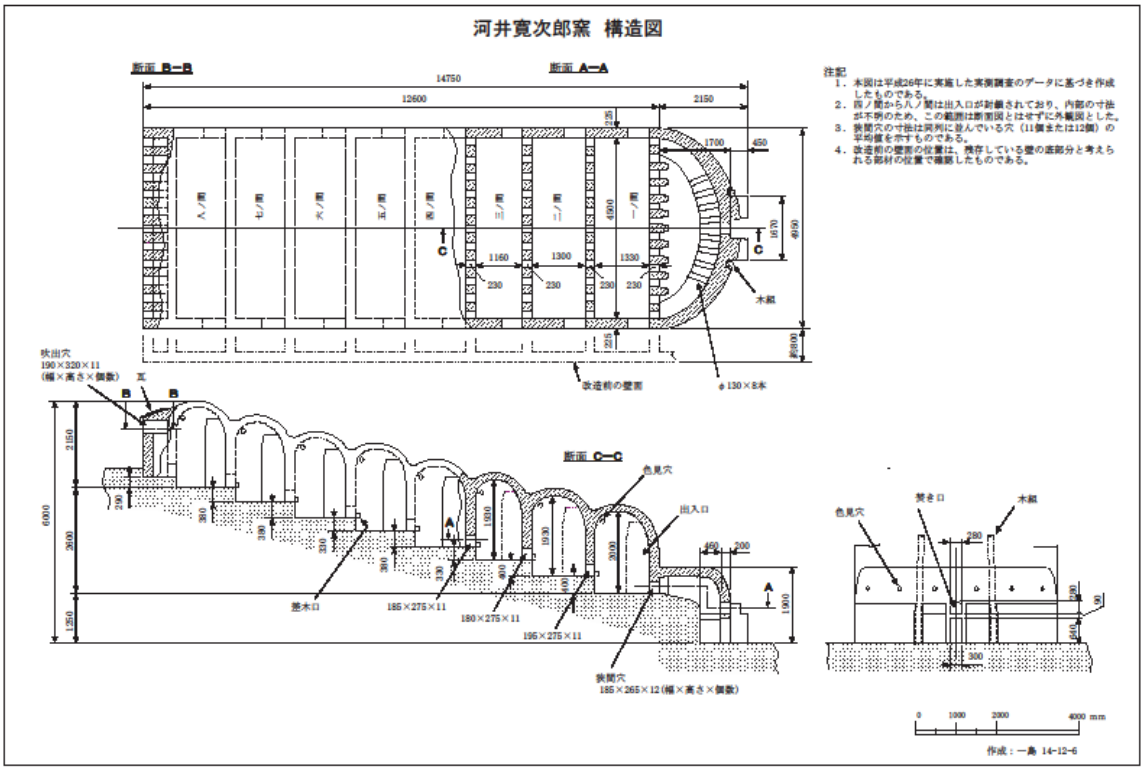
実測図２：浅見五郎助窯（平成 19 年、21 年採寸）



復元図３：　小川文斎窯（大正 6 年～8 年採寸）



復元図４： 清風與平窯（現：井野祝峰窯）（大正 7 年 12 月採寸）



実測図３：河井寛次郎窯（平成 26 年 10 月、11 月採寸）